

## 国際地理学会議（ロンドン・一九六四年） の概況

石田龍次郎

地理学では遠く、一八七二年にアントワープで第一回の国際地理学会議 International Geographical Congress (一九三〇年ごろまで日本語では「国際」の代りに「万国」という文字を使っていた)を開いており、以来、四年に一回の割で開かれていたので、国際的交流は他の社会科学・人文科学の諸分野にくらべてかなり古く、かつ盛んであったということができよう。

第一次大戦後、国際地理学連合 International Geographical Union (略称 I.G.U.) がブラッセルで結成され、爾来、これが総会を開くときに国際地理学会議が開かれることになり、両者は密接不可分の関係になった。その後、会議はカイロ (一九二五年)、ケンブリッジ (二八年)、パリ (三一年)、ワルソー (三四年)、アムステルダム (三八年)、リスボン (四九年)、ワシントン (五二年)、リオデジャネイロ (五六年)、ストックホルム (六〇年) と回をかさね、本年七月ロンドンにおいて、国際地理学会議としては第二十回、地理学連合としては第十一回の総会が開かれたのである。

戦後、会議の規模、参加人員が急速に増大(約二千五百)して、とても全貌をつかまえていくことが出来なかったが、この会議に出席した一人として、資料と見聞をもととして、会議の概況をお伝えしたい。ロンドンの会期中の日日の個人的所見は、「IGU ロンドン会議私記」として、雑誌『地理』(十、十一月号)にロンドンから送ったものが載っているから、ここではもう少し客観的に会議の様相をしるすことにする。

### 一 部会の構成と中心テーマ

会議は七月二一日、ハイドパーク前のプリンスアルバートホールに女王を迎えて開会式を行なったが、会期はロンドンにおける七月二〇日より二八日までの部会と研究委員会と、その後に行なわれた現地討議・シンポジウムとよりなっていた。

部会・委員会の会場にはサウス・ケンジントンのインピリアル・カレッジの各科の教室講堂があてられた。(増築、新築の教室が多く、その設備は全く羨しいかぎりであった。)部会は九つで、その主要なテーマをあげれば、次の通りであった。

一、人口・集落地理学 a. 巨帯都市 megalopolis その成長と構造、b. 人口の構造と変化の地理学的研究、c. 集落前線の変動、台地の人口減少、d. 国際的人口移動、e. 集落型の比較研究

二、経済地理学 a. 工業立地の研究、工業の分散または集中・発達と関連して、b. 産業・人口・労働の集中測定と関連して、経済地理における統計的技術の利用——予見と計画。 〳

第七部会と連合、c. 市場地域、農耕の型、農業組織などの経済的組織・経済的地域の定義・限定・作図、d. 第一次産業、燃料、動力資源の地理学的研究、e. 地理的变化の動因としての運輸・通信の発達

三、A. 気候学、B. 水理学、海洋学、水河学 a. 都市気候、b. 気候変化、c. 熱帯気候学の研究、d. 海底地形と堆積学、e. 水収支と熱収支、f. 極地域、g. 海水面の変化、とくに水河の変動と関連して

四、生物地理学 a. 土壌の分類と作図、b. 高地気候帯における比定と特質、c. 植生史の復原の方法、d. 植生の作図と分類の問題、e. 資源保存に対する生物地理学の応用、f. 熱帯の植生における人間的原因の意義、g. 植物の近似現象の問題

五、地形学 a. 侵蝕の年代史、b. 河川の物質運搬、蛇行、河流Ⅱ第三部Bと合同、c. 地形学における統計的方法と野外実験の利用、d. 熱帯における風化作用と形態、e. 水河周縁の現象、f. 水蝕

六、歴史地理学 a. 古い地理的条件の地図的および地名的証拠、b. 森林地、沼沢地、荒蕪地の変貌、c. 工業的・都市的中心の歴史的成長、d. 景観における残存的形相、e. 過去の地理、近代をふくむ

七、応用地理学 a. 産業・人口労働の集中の測定と関連する経済地理の統計的技術の利用Ⅱ第二部と合同、b. 地域計画における地理的技術——土地利用計画、都市地域、荒廢衰微す

る産業・資源の地域、行政区劃の再編等に関連して、c. 自然環境の大規模の改変、d. 後進地域の地理学的問題、d. 国家の国内・国外問題に対する地理学の応用

八、地誌学 a. 地理学における地域概念の妥当性、b. 地誌的記述の問題、c. 比較地誌学、d. 新しい技術の応用を示す事例研究、e. 地理学思想の歴史

九、地図学 a. 地図学史、b. 図的表現に対する新しいデザインと新しい主題、c. 小縮尺図における起伏の表現、d. 植生と地形学的形相の図的表現、e. 地理学的研究における写真判読の応用

以上をみればわかるように、部会ならびにその中心テーマは、地理学の全分野をおおっていて、どのような研究もどこかに含めることができるようになっていた。これはコンGRES方式であるためであるが、反面からいえば会議全体としては、茫漠として焦点のない感じはまぬかれない。これを少し統計的に処理してみると次のようになる。

部会	提出アブス		
	回数	開会	委員会
人口・集落	一三六	九	八
経済地理	一五二	一〇	四
気候学	三三	五	七
水理・海洋・水河	二八	五	二
生物地理	三二	七	二〇
地形学	一六〇	九	四一
			四八

歴史地理	四七	六	二一
応用地理	七二	一〇	四九
地誌学	六八	六	二七
地図学	一二七	六	二七
			一一二

ただし、右の表には部会開回数に合同して開かれた部会が五回、報告論文数にして二三が重複している。また提出論文要旨は委員会・シンポジウムにまわされたものもあり、この外に、政治地理六、地理教育二八があり、同様に処理された。

報告数はすべて日程表による分類で、じっさいに各部会とも多少の変動があったが、経済地理、応用地理、地形学、人口・集落の部会がもっとも多く開かれ、提出アブストラクトも多かった。聴衆もこれらはいつも二〇〇―三〇〇名であったが、少ない部会は二〇名以下のものもあった由である。

報告は一人約二〇分、質問討議に約一〇分ときめ、午前は十時から十二時半まで、午後は二時から四時半まで開かれた。各部会とも座長は三名ずつ指名されており、交代して席についていたが（座長の国籍はヨーロッパ六、アングロアメリカ七、共産圏六、あとはオーストラリア、イスラエル、日本、インド、ブラジル、南アフリカ各一名であった）、書記は一―二名、イギリスの大学の若い人がつとめ、何くれとなく運営の世話をした。

## 二 研究委員会の開催とテーマ

国際地理学連合には一七の常置の研究委員会 (Commission) があって、各数人の委員が指名されており、四年目ごとの会議の間に一回ぐらい、世界のどこかで集合して情報を交換したり、小さな会合を開いたりしているが、ロンドンの会議では各委員会とも開かれ、論文が発表され、あるいは打合せ会を開いていた。

委員会とその会合回数および報告論文数は次のようであった。

世界の土地利用調査 (二回、七論文)。世界の人口地図 (二回、八論文)。病気地理 (一回、五論文)。経済地域の方法 (一回、六論文)。カルスト現象 (一回、五論文)。斜面の発達 (三回、一二論文)。氷河周縁地形 (二回、九論文)。乾燥地域 (三回、一三論文)。海岸地形 (二回、九論文)。大西洋周辺の侵蝕地形 (一回、五論文)。湿润熱帯地方 (一回、三論文)。応用地形学 (二回、八論文)。地理教育 (四回、一六論文)。図書館における地理書・地図の分類 (一回、二論文)。ナショナル・アトラス (三回、一二論文)。国際的地理学用語 (一回、一論文)。

おのおの論文の報告のほかに、打合せ会を開いていた。古地図、地図学の二つの委員会は打合せ会だけであった。また会期後にシンポジウムと連合して委員会討議が開かれたものもある。

委員会は問題が限定されているし、また数年間、ごく少数の人々の間でディスカスされていたことであるから、出席した人

の話を総合すると、部会よりはまとまっていたようである。なお年二回出ている *IGU Newsletter* の六四年一一二合併号(五一頁)は各委員会の報告を集録してある。

### 三 野外研究とシンポジウム

地理学会議では学問の性質上、部会・委員会の論文報告討議と同じ位の重要さをもつて、エクスカージョンが行なわれるのが常であるが、今回も野外研究 *Field studies* とシンポジウムがロンドン会議の前と後に計画された。シンポジウムも野外研究も、ともに明確な問題点を示してあり、単なる旅行に終らぬよう、担当大学および指導者は、一年前から詳細な準備をしていた。しかし短いのは五日、長いのは一〇日にも及び、一日五ポンドという比較的高い経費のためか、参加申込みが少なく、中止したものが全体の三分の一以上もあり、けっきょく行なわれたのは、野外研究は会議前に九、後に一一、シンポジウムは前に一一、後に五で、中止されたのは合わせて二二であった。

シンポジウムの参加者はロンドンにおける部会・委員会とは別に、もう一つ論文を提出することができた。シンポジウムには一カ所に止まってもっぱら討議するものと、そのテーマについて二―三カ所移動するものとあったが、前者でも必ずバスを使って具体的な見学が計画されていた。シンポジウムの三―四の例をあげれば次のごとくである。

都市地理学、現在の機能的観点から、(一)、中心地域の再開

発、二、市内の通信・運輸、三、大都市の影響(六泊五日間ノッチンガムにて。論文報告討議七一〇回。Corby (New town) と Coventry 見学。同大学の K. C. Edwards 教授担当)。  
農村とその発達(一、ケルト・ローマ、アングロサクソン、およびその後の集落と土地利用、二、中世の農村景観の解釈、三、人口減少、囲い込み、国内的・国際的条件による農耕の変化等による農村集落と土地利用の急激な変貌)九泊十日間、北ウェールズからアングロ・ウェールズの境界を経て Leicestershire まで。パーミンガム大学の H. Thorpe が担当。

更新期地形学(一、地表の氷の状況、二、低地における氷河の堆積、三、更新期景観における侵蝕営力の相対的効率、その他)五泊四日、ケンブリッジにて、六回の論文討議と野外研究。同大学の B. W. Sparks が担当。

熱帯の地理学(一、土壌と農業、二、土地計画、三、応用気候学、四、地形学、五、人口移動と都市化)リバプールにて、同大学の R. W. Steel 教授担当。IGU 湿潤熱帯委員会と合同。

地域開発における工業計画(一、工業立地政策の地域的効果、二、周辺工業地域の問題、三、地域開発における成長産業の役割、四、農村地域への工業の分散、五、港市および大都市域における工業の地帯区分、六、商業地区)ニューカスルにおいて七日間。論文討議と東北イングランドの工業地域の野外研究。同大学の G. H. J. Daysh 教授担当。

シンポジウムは大体、このように中心テーマとプログラムを

かかっていたが、野外研究の方も、プログラムで詳しい研究課題を示していた。ただちがうことは、野外研究では大いに移動して歩くのが多かったようである。スコットランドのハイランズ、ウェールズ地方、アイルランド一周、イギリス主島縦断、東部イングランド(集落と農業)、ヨークシャーとランカシャー、中部イングランドのスカープランド、海峡諸島、外へブリデス諸島、アイルランドの更新期地形、等々のごとくであった。

またロンドンの会期中、部会・委員会と平行して七月二〇日から二九日まで毎日、半日または一日のロンドンおよび近郊の見学が六四計画された(ただし、内二二は同一のものが重複)。対象は都市地理的なものとしては、ロンドンの発達と機能、ウエストエンド、イーストエンド、シティ、ロンドン港など、経済・社会地理的なものとしては、テムス沿岸の工業、土地利用、田園都市とニュータウンなど、自然地理的なものとしては、テムズの河岸段丘、水河地形、ロンドン盆地の第三紀岩石など、関係機関の見学先としては、気象台、天文台、海洋学研究所、海軍水路部、陸軍測量部、水力研究所、植物園、住宅自治省の地理部、地図会社、海外研究所の航空写真調査などがあり、またオクスフォード、ケンブリッジ、パークシア、チャルターンズ、ウィルドなどの近郊をまわるものもあった。部会の報告・討議に出ないで、もっぱらこの見学に参加していた人も多かったようである。

ロンドン見学はとにかくとして、会議前後のシンポジウムと野外研究はイギリスの全地理学界をあげての計画であって、不

幸にして参加者が少なく中止されたものが多かったが、その多様さ、内容の豊富さは、日本などの現状を考えると、羨しいかぎりであり、イギリス地理学の幅を示したものであった。

#### 四 展示会と講演会

会期中、会場内および付近のビルで、次のような展示が行なわれた。

**主題的特殊地図** I G U加盟国のうち二九カ国から、自然(地形、起伏、地震、湖沼、気候、植生、氷河、水理など)、社会経済(土地利用、人口、都市、資源、土地制度と集落、市場、運輸、歴史など)に関するあらゆる地図で、各国その国風を示していた。目録発行。日本からは国土地理院、総理府、地質調査所などの地図が出陳されていたが、目録には不詳となっていた(王立芸術大学講堂)。

**イギリス地図学の発展** イギリスの地図製作史およびイギリス島の中世から近代測量までの地図の発達(大英博物館)。

**イギリスの地図展** 現在のイギリスの地図類(地質博物館とモルモン教会で)。

**ロンドンの発達展** 紀元四三―一九六四年の関係資料。初公開の資料も多かった(ピクトリア・アルバート博物館)。

**王立地理学協会の事業** 同協会が探検事業について行なった関連資料(同協会)。

そのほか、会場内には、イギリス発行の地理書、イギリスの地理学定期刊行物、中等学校の地理教育用図書、各国のナシヨ

ナルアトラス等を展観する室もあった。

会期中に五つの講演が行なわれた。はじめの四つは王立地理学協会で、最後の一つはテムス河畔の Shell Centre で、おの夜の八時半から開かれた。

イギリスの氣候 (ランカシア大学環境研究科 G. Manly 教授)、近代の探検、その人間と方法 (Sir V. Fuels)、低開発国の二重構造——社会地理学の問題 (IGU 会長演説、ボン大学 C. Troll 教授)、計画と地理的変化 (住宅自治省の主任企画官 J. R. James)、北海 (ロイヤル、ダッチ、シエル会長 Brodwer)、大陸棚の法律 (Lord Shawcross)。

また同じく会期中、会場近くの Institut Francais Film Centre で映画が七日間、午前、午後、夜と一四回行なわれた。大体一本二〇—三〇分のもので、単なる旅行記録や珍奇なものでない学問的な映画で、一つは部会・委員会と関係のあるもの、他は一般に地理学に関係のあるもので、主なものをあげれば、

今日および明日の都市 (ロンドンの成長、郊外の生活とその六つの解決、都市の交通)、前進するアフリカ (エジプトのナイル、スワジランドのウストツ、ナイゼリア国の構造)、水 (海洋の挑戦、オーストラリアにおける蒸発の制禦、南アパラチアの水、オランダの干拓)、今日の探検 (ボルネオの洞穴考古学、世界最高峰の征服、南極大陸の原子力)、地球の自然史 (カナダの森林、キラウエア火山の一九六〇年の噴火、グランドキャニオン、オーストラリアの洞穴)、世界の

食糧 (南イタリア農村の生活向上の実験、ニュージーランド雪線付近の牧羊、砂漠を緑化するクーエート、食糧か飢饉か)、現代の経済発展 (ヨーロッパ共同市場、カナダ西北テリトリー、アイルランドの泥炭地、インドの電化)、開発と川 (オーストラリア北方への挑戦、川の流域変更によるカスビ海の水面上昇、カナダのマッケンジー川の開発とエスキモ、エカフエのメコン川開発)、宇宙船フレンドシップ七号、イギリスの各地方 (イギリスの土地、万人の王国、東アングリアの休日、ハイランズ、都市問題など二回分)。

これらの映画は Film Centre Limited が会議の依頼を受けて集めたもので、イギリスおよび同連邦諸国と合衆国のものが主であったが、日本でも依頼を受けたら、出品してははずかしくないものがなくはなからう。

##### 五 会議の出版物

この会議のために出版配布されたものは、次のようなものである。

*The British Isles: A Systematic Geography*, ed. by J. Welford Watson, 51 figs., 452 p.

イギリスおよびイギリス諸島の個性、イギリスの地理学者とイギリスの地理学、イギリスの地図からはじまって、氣候・水理・起伏・第三紀地形発達・氷河時代・氣候環境の变化等の自然諸条件、歴史地理 (アングロサクソンの到来、産業革命)、土地利用の問題、農業と漁業、鉱物資源と動力、工業、運輸、

人口、農村集落、都市、文化地理、世界構造におけるイギリス諸島まで二二章の論文集。

*Field Studies in the British Isles*, ed. by J. A. Steers, 85 pl., 528 p.

前掲の会議前後の野外研究について、テキストを兼ねた三三の論文集、前者がイギリスのオーソドックスの地理書とすれば、これはケース・スタディといえよう。

*Guide to London Excursions*, ed. by K. M. Clayton, 70 pl., 162 p. (大判)

会期中のロンドン見学と関連して、四二の見学地域の問題についての論文と、見学の地理学関係の官庁・研究所・団体の紹介と解説をしたもの。ロンドンの地理研究書とも見える。

*Abstracts of Papers*, ed. by F. E. Ian Hamilton, 361 p. 同補遺 34 p.

会議に提出された全論文要旨を分類したものの。要旨は六三年十一月はじめまでに二五〇語以内で出されたものであるから、ごく大体の輪廓を知り得るだけである。(論文は六四年三月はじめまでに、二五〇〇語で提出することになっており、発表予定者は提出したが、これは印刷されない。)掲載されている要旨の著者の数は八四八、補遺六六を数える。

この会議を記念して、いくつかの国の学協会で機関誌の特別号を出した。わかっているものだけをあげると、

*Geography (Journ. of the Geogr. Association)* 四九卷三号 (六四年七月)、*シエフィールド*に本拠のあるイギリスの教育的

な地理雑誌であるが、平常号と同じ論文、書評のほかには *This Changing Britain* という総題の二三論文が特集されている。

*Denmark: Collected Papers*, ed. by N. K. Jacobsen n. y. n. ハーゲン大学地理学教室発行で、同教室員の業績をとくに英文でまとめたもの、二三論文。一五三頁、図版多数。

*Presidential Addresses delivered to the Institute of British Geographers* イギリスの地理研究団体の一つである同所の六三年の会長 Linton 教授、六四年の Beaver 教授の会長演説をまとめたもの、五九頁、図版多数。

このほか、雑誌の内容はとくに平常号と大差ないが、*Petersmanns Geographische Mitteilungen* (一〇八巻、六四年一一二合併号) や *Zeitschr. f. Erdkundeunterricht* (一六巻、六四年五一七号) など東独発行のもの、オランダの *Tijdschr. voor Economische en Sociale Geografie* (五五巻、六一七号、六四年) などには表紙か巻頭に I G U 会議を祝して云々の短文がのっているものもあり、その国の概括的な地理を論じたものもがのっているものもある。あるいは最近号を参加者に配布した学協会も多かった。こういう機会に自国の地理学や刊行物を弘報しようという動きはかなり活発であった。

ロンドン駐在の各国大使館などで、他国の地理学者を招いてパーティを催し、接触をはかったところも多かった。もちろん個人的に、著書や別刷をくれ今後の研究上の交換を申入れた学者も多かった。今度の会議出席の最大の利益は、これであった。

## 六 国際地理学連合の総会

会期中にIGUの総会が三回開かれた。これはIGUという組織の行政的決定をするためであり、直接、地理学研究を行なうものではなく、第一回目はわたくし自身の経済地理部会で論文報告をしている時とかちあつていたので出られず、けっきょく一回半だけ出席したが、出席者は三百人たらずであつた。

総会では研究委員会の存続および新設、それに新しい委員の指名をし、次期四年間の理事と会長をきめ、次回の会議開催地と時期(インドのニューデリーで六八年十二月)をきめたりした。中間の地方会議は六六年にメキシコでラテンアメリカ研究のために開かれることもきまつた。

この総会でもっとも重要な一議案は、IGU規約の変更であつたろうと思う。これは数年前から委員会を作つて練つていたものであるが、今回、理事会原案として出された票決権数の変更(加盟国の分担金の多寡によつて票数をかえるという案)が、総会において否決された。これがどういふ背景と論議の上で原案として出されたかは、詳らかに知らない。日本は今回まで八年間理事を出しておつたが、一向にこういう問題については聞かなかつたし、また国内委員会||日本学術会議の地理学研究連絡委員会でも、ほとんど討議されず、たまたま出席した総会で唐突にそういう話をきいて、わたくしはほんとに驚いた。

## 七 会議における二、三の所感

以上、ロンドン会議の概況をなるべく客観的に資料によって述べたが、最後に参加者の一人としての所見を一、二記しておく。(詳しいことは改めて他に記す予定)

第一は Regional science と地理学について。今回、応用地理学と経済地理学の連合部会にはリージョナル・サイエンスの報告がかなりあつて、一部から地理学としてはナンセンスだといふような議論のやりとりがあつた。

私見をもつてすれば、従来の経済学が空間的観念に考慮を払うことが少なく、わずかに工業立地的な考えがあるだけであつたのをうめるものとして、リージョナル・サイエンスが発達したと思われるが、そこでは空間は数式化するために抽象化されたものとなるので、実体的具体的空間||地域を考えている地理学から批判がでるのであるうと思う。たしかにリージョナル・サイエンスそのものは地理学ではないにしても、これを全然、のけ者にしては、地理学の発展からみて遺憾であるう。

リージョナル・サイエンスを経済学と地理学・経済地理学の中間領域とするためには、地理学の素養を抜きにしてはだめであろう。地理学の畑からこの方に近づこうという人は、とくにそれははっきりさせねば、経済学の一分科にはなつても、地理学としてはもちろん、中間領域ともなり得ないであろう。

第二は経済地理部会の座長をしていたときの感想であるが、

ソビエト会員の報告に対して、アメリカ会員から「あまりにもポリチカルな議論で、アカデミックでない」という批評が、一再ならずあったことである。何分にも短い時間の報告を、さらに短い時間の討議応答であるから、意をつくさないことばかりであったが、たしかに共産圏の学者の報告には、過去および現状の分析についても、とくに将来の見通しについては、性急に社会主義社会の優越性というようなものに言及しようという態度がなくなかった。

第三は現地討議・野外研究に十分な調査と準備があったことはもちろんであるが、もともと欧米の地理学界では、一大学の地理学教室の研究者の研究対象は、自然地理、歴史地理、集落地理のどの分野についても、多くはその大学所在の州・県・地方であって、日本のごとく四国のA大学の人が東北地方の何かを、また東京B大学の人が関西を研究するというようなことは少ないようで、いきおい研究・調査は徹に入り細をうがつということになる。何を質問しても、じつに詳しいのに驚いた。

もう一つ、野外研究旅行の運営について、日本とちがうところは、一日の見学・研究の対象を午前につ、午後につという位にしぼり、十分な時間をかけることである。日本の地理学会では、出発点から帰着点までのルート付近にあるもの、すべ

てにふれようとするから、一つ一つは極めて簡単になる傾向がある。あまり対象が多くなれば、地理学的バス見物旅行になっ  
てしまう。

第四はIGU総会における票決権数の問題。前にしるしたように、理事会の原案は現行の一国一票をかえて、国によって票数をかえようというのである。たしかにIGUにおける各国の寄与の仕方は異なっている。分担金をみても年、百ドルの国から千五百ドルの国まであり、国内の地理学者の数、毎回の会議に出席する会員の数も、一―二人の国から百人以上も出席する国もある。

それこれを考えて、票決権数に差等をつけようということになったのかと思われるが、反面からいえば大国の意志の尊重となり、小国の意志の無視ともなりかねない。あるいは、小国の現実にあわぬ計画案に対して、大国の現実に即した実行案との対立(そういう対立がもしIGUの事業のなかにあるとすれば)を解決する方法として提案されたのかもしれない。

後にヨーロッパからアメリカへ渡って、見聞したなかに、アメリカの庶民が国連に対して同じような感想をいだているか  
に感じたのと思ひ合わせて面白く思ったことである。

(六四、一〇、一七)(一橋大学教授)